

## 秦封泥の泰医丞について

猪飼 祥夫

北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

封泥は約200年前に発見されてから、金石学者や篆刻家、古文字研究者によって注目されてきた。とくに1995年から中国陝西省西安市の相家巷地区で大量の秦の封泥が発掘された。それらは北京の古陶文明博物館、西安の中国書法芸術博物館、澳門の珍秦齋や日本などに分散して所蔵されている。

封泥は、古代の書物や器物、門扉を封印するために使われた泥に押された印文である。紙が一般に普及する時代以前には、竹簡や木牘を用いて文章を書き表していた。その竹簡などを編み上げて、書物としてまとめ袋に入れて縄で縛る時、封検という木を上において、その上から縄を縛る。封検は数量を書いたり、差出人や宛名などを書いて木の上に粘土を押し込んでそこに印を捺す。封印されているので、密かに開けられることを防止することができ、秘密保持ができ、もし開ければ証拠が残ることになる。

相家巷の封泥は戦国期の秦国から始皇帝をへて、二世皇帝までの時代のものである。時代が限定しているばかりでなく、出土地点も秦の甘泉宮（またの名を咸陽南宮）であると考えられている。ここから泰医丞印の封泥が中国書法芸術博物館に2顆、古陶文明博物館に7顆、日本篆刻美術館に2顆が蔵されている。太（大）医丞印の封泥が古陶文明博物館に1顆、泰医左府の封泥が中国書法芸術博物館に1顆、泰医右府が中国書法芸術博物館に2顆蔵されている。泰医丞は太医丞のことである。秦封泥では太（大）の字は戦国期のもの、泰の字は統一後のものとされる。さらに漢成立後はまた太（大）が用いられる。

泰医丞は、官名であり、太医令の佐官である。『春秋左氏伝』の成公10年（BC581）の記事に、晉景公が病となり「求醫于秦。秦伯使醫緩爲之。」という。醫和は昭公元年（BC541）に「晉平公生病，向秦國求醫。秦景公派醫和去給他治病。」「秦多良醫，醫緩醫和皆是秦人」と『左氏傳續説』卷八にいう。また『史記』扁鵲伝に「秦太醫令李醯，自知伎不如扁鵲也。使人刺殺之。」という。これらの記事から、戦国時代から秦の医学が他の国より進んでいたことがわかる。

太医令は『漢書』の百官公卿表の「奉常，秦官，掌宗廟禮儀，有丞。景帝中六年，更名太常。屬官有太樂，太祝，太宰，太史，太卜，太醫六令丞。」から、漢代初めには太医には令と丞が置かれていたことがわかる。これは秦官とあることから秦の制度による官僚制度である。この太医令，太医丞は奉常に属しているものである。また「少府，秦官，掌山海池澤之稅，以給共養。有六丞。屬官有尚書，符節，太醫，太官，湯官，導官，樂府，若盧，考工室，左弋居室，甘泉居室，左右司空，東織西織，東園匠，十六官令丞。」とあり，少府にも太医令と太医丞とあり，皇帝の内府に付属する官僚である。『後漢書』に「太醫令一人六百石」「本注曰，掌諸醫。漢官曰員醫二百九十三人，員吏十九人」とあり引用の『漢官儀』は医員の数を293人とする。秦においてもその数は少なくなかったと思われる。秦の封泥に見る泰医丞は少府に属する官僚か，奉常に属するものかは不明であるが，この時代の医官のものであることに間違いはない。また1顆だけ見られる太医丞は戦国期の医官であると思われる。泰医左府と泰医右府は，何らかの仕事の違いがあったと思われる。その機能の違いについては今明らかではない。これは，秦の医員の数が少なくなかったことを明らかにしている。これらの封泥にみる医官印を調べることによって，秦の医学制度の一部を知ることができた。